SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

キングダム２
遥かなる大地へ

2022 年／日本映画
配給：東宝／134 分

2022（令和４）年７月 16 日鑑賞	TOHO シネマズ西宮 OS

Data　２０２２－８６

監督：佐藤信介
脚本：黒岩勉、原泰久
原作：『キングダム』原泰久
出演：山﨑賢人／吉沢亮／橋本環奈／清野菜名／満島真之介／岡山天音／三浦貴大／濱津隆之／豊川悦司／高嶋政宏／要潤／加藤雅也／高橋努／渋川清彦／小澤征悦／大沢たかお

みどころ

秦の嬴政、後の始皇帝は、如何にして中華統一を成し遂げたの？その史実や真相を知るために学ぶべきことは多いが、架空のキャラも交えて楽しみつつ学ぶには、既刊６５巻になっている漫画『キングダム』を読むのが一番！

若き日の嬴政と信との友情は？信が憧れる王騎将軍の魅力は？実写版１は、ほんの序章だったが、実写版２は、秦と魏の「蛇甘平原の戦い」を描くもの。「関ケ原の戦い」「ワーテルローの戦い」さらには「五丈原の戦い」と対比しながら、その規模や迫力を楽しみたい。

第１作には“山の民”の王たる美女・楊端和が登場したが、第２作では“悲しみの暗殺一族・蚩尤”の美女・羌瘣が登場し、あっと驚く“殺しのテクニック”を披露するので、それにも注目！

伍の一員としての奮闘で信は大出世を遂げたが、王騎将軍に追いつくのはまだまだ先。引き続いて、２０２３年公開予定の第３作に期待！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■原作漫画もＴＶアニメも大人気！実写版２は必見！■□■

累計発行部数９０００万部超の大ヒットを誇る原泰久の原作『キングダム』を、２０１９年に実写映画化した『キングダム』（１９年）は、興行収入５７億円の大ヒットを記録した。私は、その「みどころ」として、「漫画とバカにしてはダメ。現在まで刊行された原泰久の『キングダム』５３巻は、中国の春秋戦国時代を舞台に、大将軍になるという夢を抱く戦災孤児の少年・信と、中華統一を目指す若き王・嬴政を壮大なスケールで描くもの。すると、それを実写映画化すれば、『始皇帝暗殺』（９８年）、『HIRO（英雄）』（０２年）や、かつて勝新太郎が主演した７０ミリの超大作『秦・始皇帝』（６２年）にも並ぶエンタメ超大作に！」と書いた（『シネマ４３』２７４頁）。

実写版第１作たる同作は、単行本が５３巻刊行された時点で、１から５巻を実写化したものだったから、まだまだ序の口。そのため、「みどころ」の最後には、「嬴政と“山の民”との同盟はいかにも漫画チックだが、全編を通してキーマンになるのは、いかにも一匹狼的で謎めいた王騎将軍。本作で兄弟ゲンカのケリはついたが、『この国のかたちは？』と問う王騎に対する嬴政の答えは・・・？ 以降のシリーズでは、「始皇帝暗殺」に至るまでの、秦王・嬴政の前向きの国づくりの実態をしっかり見せてもらいたいものだ。」と書いた。

他方、大人気の原作漫画は、２０１２年６月からすでに第１、第２、第３シリーズが TV アニメとして NHK の各チャンネルで放映されている。そして、２０２２年４月からは、その第４シリーズが NHK 総合で放映されているため、私はそれを全て録画して鑑賞している。

このように、原作漫画も TV アニメも大人気、しかも実写版１も大ヒットした本作の実写版２は、こりゃ必見！

■□■五丈原の戦いは有名だが、蛇甘平原の戦いは？■□■

現在鑑賞中の中国時代劇 TV ドラマ『三国志～司馬懿 軍師連盟～』の後半は、蜀の軍師・諸葛公明と魏の軍師・司馬懿の“知恵比べ”が面白い。その最大のハイライトは五丈原の戦い。そこでは、「死せる孔明、生ける仲達を走らす」の“成語”が有名だ。

しかし、『キングダム』の実写版２が描くのは、若き王・嬴政（吉沢亮）が誕生した秦の国に、隣国の魏が侵攻してきたことによって生まれる蛇甘平原の戦いがメイン。この戦いにおける魏の総大将は、かつての秦の六代将軍に並ぶと噂される、軍略に優れた天才・呉慶将軍（小澤征悦）。それに対する秦の総大将は、戦いと酒に明け暮れる猪突猛進の豪将・麃公将軍（豊川悦司）だ。『キングダム』全編で“注目のキャラ”として登場するのが、大沢たかお扮する王騎将軍だが、実写版２では、蛇甘平原の戦いにおける麃公将軍と呉慶将軍がキーマンになるので、それに注目！日露戦争では「奉天会戦」が、ナポレオン戦争では、「ワーテルローの戦い」や「ライプツィヒの戦い」が大会戦として有名。「関ケ原の戦い」も、天下分け目の大会戦だった。しかして、中国の紀元前２世紀における大会戦、「蛇甘平原の戦い」は如何なる展開に？

ちなみに、本作のサブタイトルになっている「遥かなる大地へ」は、トム・クルーズとニコール・キッドマンが共演したハリウッド映画『遥かなる大地へ』（９２年）と全く同じ。同作は、かつてアメリカにあった、いくつかの区域に分けられた土地に誰よりも早く着いた者が旗を立てて自分の土地にできるという、“ランドレース”と呼ばれる制度を夢見て、アイルランドからアメリカに移ったトム・クルーズが扮する小作人が奮闘するというストーリーだったから、『遥かなる大地へ』というタイトルがいかにもピッタリだった。中国大陸もアメリカ大陸と同じように広大だが、六国が争う戦国時代における魏 VS 秦の「蛇甘平原の戦い」をテーマにした本作で、「遥かなる大地へ」というサブタイトルはあまりピッタリこないのでは・・・？

■□■伍の仲間は？信の活躍は？総大将の戦略と指揮は？■□■

伍長や軍曹という兵隊の階級は今でも生きているが、秦軍の歩兵は伍（５人組）を最小の単位とし、その集合体として構成されていることを本作ではじめて知ることができた。５人組を組むのなら、強い奴と組んだ方が得。誰でもそう思うから、強そうな奴から順番に“売れていった”のは当然。その結果、同郷の尾平（岡山天音）、尾到（三浦貴大）と再会した信（山﨑賢人）が彼らと組んだのは当然だが、あとの２人は、“残り者”の頼りない伍長・澤圭（濱津隆之）と、子供のような風貌に哀しい目をした羌瘣（清野菜名）と名乗る人物になったからアレレ、こんな最弱の（？）５人組でホントに大丈夫？

他方、平地の大会戦では、小高い丘をどちらが占拠するかが大きなポイントになる。関ヶ原の戦いでは、松尾山に布陣した西軍の小早川秀秋が裏切ったことによって大勢が決したが、本作でもそれと同じような丘の争奪をめぐる攻防戦が展開されていくので、それに注目！面白いのは、秦の麃公将軍が歩兵だけを前線に出して、騎兵を全く動かさないこと。そのため、騎兵を指揮する縛虎申（渋川清彦）はイライラ状態だが、それは一体なぜ？他方、私が納得できないのは、『三国志～司馬懿 軍師連盟～』に見る戦いでは大量の弓矢が行き交う風景が常だったにもかかわらず、本作では両軍の激突前の弓矢合戦がないこと。これは明らかにおかしいのでは？蛇甘平原の戦いをメインに描く本作では、５人組の一員としての信の奮闘と双方の総大将の戦略・指揮に注目！

■□■第１作は楊端和と河了貂、第２作は羌瘣に注目！■□■

第１作には山界の王、楊端和（長澤まさみ）率いる山の民が登場し、秦の嬴政は彼らと同盟を結んだが、これはいかにも漫画的なキャラだった。もっとも、山の民がこれほど異様に映るのは仮面のためで、仮面をとって１人ずつの素顔を見れば、楊端和は本当は美しい山界の王だった。また、第１作の導入部では、信の逃亡を手助けする自称、戦闘服を着ている河了貂（橋本環奈）が登場したが、実はこれも、戦闘服を脱ぐとかなりの美女だった。

それに対して、第２作で注目すべきキャラとして登場するのが、無口で陰気、そして何を考えているのかサッパリわからない雰囲気でいっぱいの羌瘣。５人組はお互いに助け合うのが当然だが、羌瘣はシャーシャーと、「自分のためには戦うが、他人を助けるのはまっぴら」と言っていたから、当初はみんなから嫌われたのは当然だ。しかし、蛇甘平原の戦いの中で孤立してしまった秦の歩兵軍団の中、羌瘣は自分のためにはもとより、５人組のために信と共に大奮闘するので、その戦う姿に注目！その途中で羌瘣が実は女だとわかってしまうが、彼女はどこでそんな“殺しのテクニック”を身につけたの？

彼女は“悲しみの暗殺一族・蚩尤”の１人で、姉同様だった羌象（山本千尋）の仇を打つため、魏との戦いに参加していることが、あるシークエンスでしんみりと明かされるので、それに注目！

■□■騎兵の特徴は？突撃命令に注目！その迫力は？■□■

騎兵の最大の特徴は、スピードを生かした突破力にある。日本陸軍の騎兵を育成したのが、『坂の上の雲』の主人公の１人である秋山兄弟の兄・秋山好古。彼はフランスに留学する中で騎兵のそんな特徴をしっかり学んだが、いかんせん日本の騎兵は、馬も少なければ兵の数も少ないから、一旦そんな突撃命令を下して多くの人馬を失えば、それで一巻の終わりになってしまう。そのため、日露戦争における実戦では、騎兵は馬から降り、守りに徹していたそうだ。

それに対して、本作では、信たちの奮闘で秦の歩兵軍団が想像以上の踏ん張りを見せる中、騎兵を率いる麃公将軍は、魏の総大将・呉慶将軍の本陣を目指して、一見無謀とも言える突撃命令を下すので、それに注目！敵の馬を奪い取った信は麃公将軍の隣につけて突撃命令に従ったが、本作ではその迫力ある突撃ぶりをしっかり堪能したい。

■□■様子見の王騎将軍は解説者に！総大将の一騎打ちは？■□■

本作を描く「蛇甘平原の戦い」で第１に納得できないのは、前述のとおり、両軍激突前の弓矢合戦がないこと。第２に納得できないのは、「蛇甘平原」であるにもかかわらず、両軍が攻防の要とする小高い丘が存在しているうえ、騎兵の猛攻にさらされた秦の歩兵軍団が全滅必至と見られる中、信たち一部の敗残兵たちが山の中に（？）逃げ込み、九死に一生を得ることだ。まあ、漫画が原作だし、エンターテイメント超大作だから、そんな粗探し（？）のようなことを言わなくてもいいのだが、これはどう考えても不自然では・・・。他方、本作の脚本作りには原作者の原泰久氏が参加したため、戦いの真っ最中であるにもかかわらず、原作にはない、信と羌瘣とのしんみりとした語りのシークエンスが登場する。これは映画としては面白いし、本作では信の次に羌瘣を主人公として扱っていることを示すものだ。

したがって、本作では秦の六大将軍の１人で、信が憧れる王騎将軍の出番はなし！そう思っていると、歩兵軍団の頑張りを見た秦の総大将・麃公将軍が馬にまたがって突進していく局面になると、突如、王騎将軍が戦場に現れ、丘の上に陣取ったうえで蛇甘平原の戦いの“解説”がなされるので、それに注目！大相撲では、元横綱の北の富士親方の名解説（？）が有名だが、王騎将軍による側に位置する信に対する、蛇甘平原の戦いの解説は如何に？王騎将軍は蛇甘平原の戦いには一切参加せず、様子見を決め込んでいたが、なるほど、さすが天下の六大将軍の１人だけあって、その解説は適切だ。大方の予想に反して麃公将軍は遂に呉慶将軍の本陣まで到達。そこで麃公将軍は呉慶将軍に対して、一騎打ちを呼びかけ、呉慶将軍はそれに応じたが、さてその結末は？その実況中継と解説はあなた自身の目でしっかりと。

■□■撮影はどこで？合戦の規模は？迫力は？第３作はいつ？■□■

「蛇甘平原の戦い」の規模が関ヶ原の戦いやワーテルローの戦い、さらに後の五丈原の戦いと比べてどうなのかは知らないが、その戦いをメインに据えた実写版２たる本作は、

戦いの規模も迫力も素晴らしい。現在の映画界では CG 撮影で何でもできてしまうが、本作の撮影がそうでないことは肉弾戦の迫力を見ればよくわかる。しかして、その撮影はどこで？それについてはパンフレットをじっくり読み込みたい。

関ヶ原の戦いは小早川秀秋の裏切りによって、石田三成の盟友・大谷刑部が討ち取られたところから急転換したが、蛇甘平原の戦いでは、麃公将軍と呉慶将軍の総大将同士の一騎打ちの勝敗が戦い全体の勝敗を決することになったのは当然。その点では、王騎将軍の解説どおり、呉慶将軍が麃公将軍の挑発に乗ったことが大きな誤りだが、その一部始終を丘の上から王騎将軍の解説付きで眺めていた信の成長も大きいはずだ。

他方、麃公将軍が呉慶将軍と一騎打ちできるまでに戦況を支えたのは、何よりも信たち歩兵軍団の頑張りにあったことは明らかだから、戦い終了後の論功行賞で信はいかなる賞を？信の夢は王騎将軍のような大将軍になることだから、その夢の実現はまだまだ先だが、伍の一員に過ぎなかった信はどこまで出世するの？木下藤吉郎は、主君・織田信長にその手腕が認められ、足軽大将になったところから出世ゲームが始まったが、さて信は？

第１作から第２作までは３年間を要したが、本作終了後の予告では、第３作は２０２３年に公開されるらしい。２０２２年６月現在、既刊６５巻になっている原作のすべてを映画化するのに何年、何作を要するのかは知らないが、第２作で蛇甘平原の戦いを描いた以上、五丈原の戦いまでは続けてもらいたいものだ。第３作にも期待！

２０２２（令和４）年７月２５日記